

新年度を迎えるに際し、隊友会活動及び支部の運営に関して所懐の一端を述べさせていただきます。
平成元年に千葉県隊友会館山支部として設立されて以来、今年で30年目を迎えることになりました。
隊友会が新公益社団法人としてスタートして8年目に入り、隊友会の事業活動は着実に進化を続けていると確信しております。災害情報協力員制度、災害復興支援ボランティア制度、災害時の千葉県への協力支援、殉職隊員・戦没者の慰霊顕彰、自衛隊家族会と連携のもと緊急時の自衛隊家族支援活動等々、まだ改善の余地はあるものの、進化とともに活動内容・対象も専門化、広域化しつつあります。
一方、活動の推進単位である支部の体制・体力を考えた場合、推進の要となる役員後任者の人選、活動への協力者の確保に(極めて)難儀しているのが偽らぬ現状であります。
館山支部が現在一つの「岐路」に置かれているとの認識のもと、新年度を節目として、「今後の支部運営の方向性を見極める1年」として臨む所存ですので、会員諸兄のご理解、ご協力のほどよろしくお願い致します。

支部の活動概要

《2・3月活動実績》

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 2. 9(金) 第21空群司令への相談役委嘱状伝達 | 4. 7(土) 千葉県護国神社春季例大祭奉仕作業 |
| 3. 1(木) 県隊友会後期支部長会議(千葉市民会館) | 4.19(木) 千葉県隊友会通常総会(千葉市) |
| 3.21(水) 館山市戦没者慰霊祭(鶴ヶ谷八幡宮) | 5.12(土) 30年度支部総会行事(市内芳喜楼) |
| 3.28(水) 21空群訓育講話支援(館山基地) | 5.26(土) 5月支部役員会(コミセン) |

《4・5月活動予定》

平成30年度館山支部支部総会等行事のご案内

恒例の館空会・隊友会館山支部合同の総会等行事を迎える時節になりました。
年1回、多くの会員が一堂に会して相互に健康や動静を確認し合い、さらなる交流を深め合うための好機であります。特に新しく入会された方々にとって、第二の人生(社会)での新たな出会いとともに、かつて衛隊で”釜の飯を共にした”皆さんとの旧交を温める上で貴重な機会になることと思います。一人でも多くの皆さんの積極的な参加をお待ちしております。 <支部長>

期 日:平成30年5月12日(土) 16:00~20:00

場 所:市内「芳喜楼」館山市山本195-1
TEL.0470-23-7211

行 事:右コラム「行事細部時程表」のとおり。
懇親会には第21航空群司令、各隊司令、各隊隊員代表の参加が予定されております。

会 費:懇親会 男性6,000円 女性3,000円

送 迎:送迎バス(別途、参加者に連絡)

出 欠:返信ハガキにより4月20日(金)までに投函して下さい。
なお、館空会に所属する会員は、館空会からの案内

<行事細部時程表>

- 16:00~ 受付開始
- 16:40~17:10 館山支部総会
- 17:20~17:50 館空会総会
- 18:00~20:00 合同懇親会

レクイエム

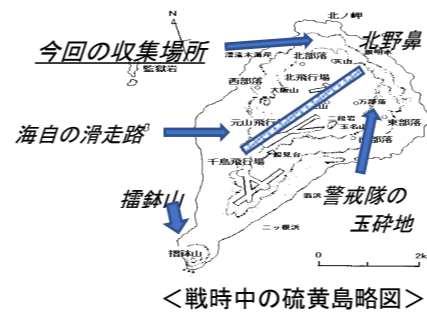
- 1/30 寺田友明会員(海事)ご逝去(享年88歳)
- 1/31 田中文生会員(海)ご逝去(享年84歳)
謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします 合掌 <支部会員一同>

会員の異動

- 3/31 下村博哉会員(海)他県へ転出
- 3/31 金澤通好会員(海)退会申告
長年の支部活動へのご協力有難うございました。ご健勝を祈念致します。

「硫黄島遺骨収集帰還事業」に参加して

今年1月31日から2月14日まで、日本遺族会の一員として、日本戦没者遺骨収集推進協会主催の硫黄島遺骨収集帰還事業に参加した正木敏順会員に、収集作業の状況を聞かせてもらい、そのあらましを紹介することにします。
硫黄島へ向けて前日、入間市内で結団式を終えた女性5名を含む総勢35名の派遣団一行は、翌31日10時に特別便のC-2輸送機で空自入間基地を離陸しました。2時間後、眼下に硫黄島を眺望して、かつてここで想像を絶する激烈な戦闘が繰り広げられ、2万名を超える日本軍将兵が本土の盾となって玉砕したことを思うと目頭が熱くなりました。着陸後、一行は天山慰霊碑に来島報告を行い、献花・参拝を済ませて宿泊所に当てがわれた海自硫黄島基地の外來宿舎で各自の寸法に合わせて準備されたお揃いのユニフォームや装具などを確認、翌日からの作業の身支度を整えました。
派遣団の陣容、遺骨収集作業の概要
今回の収集場所は島の北東部、かつて守備兵団司令部があった北野鼻地域で、厚労省の事前調査で多くの遺骨が確認されているとのこと。無味乾燥・赤茶けた砂岩だらけ硫黄島の随所に群生するネムの木の葉の緑と紅色の花弁が、派遣団一行の気持ちを癒してくれました。戦後、米軍が大量に撒布したネムの木の種子が自生したものだそうです。
○派遣団は、遺骨収集推進協会をはじめ日本遺族会、硫黄島協会、旧硫黄島民の会など、旧軍や硫黄島に関係ある人々の団体が多い一方で、日本青年遺骨収集団や国際ボランティア学生協会は20代、30代の戦争を知らない世代で編成された団体で、若いメンバーが中心になって真剣に収集に当たる姿に感動を覚えるとともに心強いものを感じました。なお、派遣団の中で今回が初めての経験者は私を含めて数名で、あとは数回、中には数十回の収集経験があるということを知り、遺骨収集が特定の人々によって行われているという現実を改めて感じさせられました。
○収集作業は、日曜の休養を挟んで毎日午前3時間、午後2時間の日程で、遺骨が発見された箇所は慎重に手掘りで作業を進め、遺骨と土砂の振り分けや収集されたお骨の洗い清めなど、終始、細かい神経を使って行いました。



○(私事ですが)休養日に、現在の滑走路の東端付近にある、叔父が所属していた陸軍第109師団警戒隊の玉砕地跡を訪ね、携えてきた叔父の両親・兄弟の遺影とともに墓標の前で来島の報告と故国の状況を伝え、長年の宿願が叶えられた思いでした。遺骨とともに帰国の途へ最終日の14日、収容された17柱の遺骨を胸に抱いて天山慰霊碑に収集作業の報告を済ませ、14時過ぎ硫黄島基地の隊員が整列して見送る中、C-1輸送機で硫黄島を後にしました。故国への帰還を待ち侘びる多くの遺骨がまだ残されている中、次第に遠ざかる島影に後ろ髪を引かれる思いでした。翌日、千鳥ヶ淵で行われた厚労省係官への遺骨引渡しの儀をもって、無事、今回の遺骨収集帰還事業の務めを果たすことができました。
以上は、正木会員の体験談を編集子が拙い文で綴ったものですが、意を尽く

「館山の防空体制」・対空砲台、防空隊

日本の防空は、陸軍が国土の防空を主導し、海軍は(自分の)軍港や航空基地の防空、すなわち局地(局所)防空という考え方に基づいていた。海軍では、軍港や艦船の造修施設、航空基地が集中する横須賀地域の防空が重視され、横須賀各地にはかなり早い時期から対空砲台の建設が進められた。小原台や猿島などに見られるレンガ造りの砲台建築物はその名残である。

房総(ここでは鋸山以南を指す)では、館山の城山(しろやま)に8cm高角砲(陸軍では「高射砲」と呼んだ)4門を装備する対空砲台が築かれ、100名近い横須賀警備隊の砲台員が常駐し、山頂へ弾薬を運搬するエレベーターを備えた3階構造の堅固な地下施設が築かれていたと言われる。これが昭和19年後半に防空体制が強化されるまで、唯一の対空砲台であった。**探知兵器(レーダー)の開発・装備は**・「飛び道具」のほかに防空に欠かすことのできないレーダー(海軍では「電探」)の開発、装備については、欧米に数年の遅れをとったと言われているが、海軍の「電探」の実戦配備は、日米開戦の年の6月、房総半島南東部の勝浦に設置された「海軍電探1号」が最初であったと言われる。当時の写真からも巨大なアンテナ、無数の真空管を組み合わせた本体はとてつもなく大きな代物で、操作及び目標の識別・判定はこれを開発した技術者しかできないほど実用化にはまだ遠かったようである。

日米開戦後の昭和17年4月に来襲した米機動部隊のドーリットル爆撃機を探知できなかったのは、機器の性能ではなく、これを横須賀警備隊に引き渡すための改修工事の最中であったことが記録から読み取れる。**館山の防空体制** 昭和19年9月に館山航空隊に防空班が編成され、市内各所に高角砲装備の対空砲台(城山含め大網、船形等計9箇所)のほか機銃砲台(北条、赤山、沖ノ島等数箇所)が建設された。横須賀警備隊に代って館空の隊員が対空砲台員として配置に就くことになったのも特筆すべき点と言えよう。昭和20年2月16日、17日、2日間にかけて館山(基地)は米機動部隊の艦載機編隊、計16波、延べ121機による波状攻撃に見舞われた。硫黄島攻略(2月19日)の前哨戦として、日本軍機による攻撃を封じるために行われた関東地区の陸海軍航空基地に対する攻撃であった。館空防空隊編成後、隊員たちが初めて経験した敵機「グラマン戦闘機」を標的とする対空砲戦であった。 <自称地域史探索マニア その19>